

## 1. テキスト

「表現作用」「一」の第1・2段落。135頁から141頁3行目まで。

## 2. テキスト解釈

今回より「表現作用」に入る。西田は『働くものから見るものへ』の「序」で「「表現作用」に於て、真に直接に与えられるものを表現作用の内容という如きものに求めた。表現作用の意識に於ては、我々は主観的意識なくして見るのである、それは主観的意識を包んだ意識でなければならぬ。意志の内部知覚という如きものは此に求めるの外ないと考えたのである」(5, 2-4)と述べている。これをどのように解釈するか。これから「表現作用」を読むに当たってこれを劈頭に掲げ、読解の導きとしたい。

### 「一」

#### (第1段落)

冒頭西田は「表現作用」に「表出運動」、「言表作用」、「芸術的表現作用」を区別し、その「内容」をそれぞれ「(或個人の)主観的感情の内容」、「(何人にも理解せらるべき)客観的思想の内容」、「単に主観的感情の内容でなくして、客観的意義を有するもの」としている。芸術は主観的感情と客観的思想の統一という形をとっている。

次いで、「表現作用」がこうした「内容」と「表現作用」と「表現其者」の三つから成っているとされる。「表現其者」とは後に出て来るように「表現を荷うもの」、「客観的事実に属するもの」(136, 4-5)のことであり、言語においては文字や音声がこれに相当する。個人的感情の「表出運動」ではこの三つが一つであるが、言語においてはこの三つが異なるとされる。例えば怒りで暴れる者において、内容(怒り)と表現其者(暴れる)とが直接的である(表出運動)であるのに対し、怒りを抑えて相手との関係を改善しようとする者において内容(改善)と表現其者(音声)は表現作用(言表作用)によって媒介されている。

#### (第2段落)

ここでは先に出て来た「内容」と「表現作用」と「表現其者」の三者の内、「内容」と「表現其者」が「客観的」で、両者を結合する「表現作用」が「主観的」だと言おうとしている。先に「感情の露出」のような場合、その内容は個人的・主観的だとされたが、「内容」が一般に「客観的対象」を持つところから、感情も厳密に考えるなら「超作用的なもの」としての「客観的対象」を持っているということを言おうとしている。例えば「おお！」という「表出運動」において、その内容は主観的であっても、何人にも理解せられるべき対象を持っているというようなことであろう。「言語作用」において、その内容は単語であれば「意味自体」、文であれば「命題自体」を客観的対象としている、とされる。これらは「我々の心理作用を超越」(136-7)して「意味の世界」(136-8)に属するとされる。

これに対し「表現其者」は「存在の世界」に属する「客観的实在(事実)」である。「表出運動」も「外面に現れたる肉体的運動」であり、「言表作用」も音声や文字という客観的实在の形をとる。芸術作品も同様である。

こうして「内容」と「表現其者」という二つの客観的な領域(意味の世界と存在の世界)を結合するのが「主観的作用」(136-8)としての「表現作用」であるが、「作用が自己の内に自己の内容を表現する場合」(136-9)、「三つのものは一つとなる」とされている。例として「表出運動」が挙げられているが、その表現からして、それは同時に「主観的作用」なくして表現する「表現作用」の究極の在り方でもあると考えられる。

### 「二」

#### (第1段落)

ここでは「作用」が一般的に論じられる。「作用」とは「働く」ということである。「働くもの」は単なる「変化」ではなく「自ら変化するもの」でなければならない。こうして変化の基体として「物」（個物）が求められる。さらに「物が働く」とは物がその性質を変化させることではなく、「二つの物が相互に働く」ということでなければならないが、そのためには両者は「一つの力によって統一」される。さらに二つの力が「互に相働く限り、それは一つの力として統一」されたものでなければならない、とされる。こうして変化が「一つの力」にまで還元されることになるが、この「一つの力」は「変ぜざる力も働きつつあるもの」とされているように、アリストテレスのエネルゲイアが念頭に置かれている。

## （第2段落）

この段落で西田は「働くもの」をさらに「知るもの」へと還元する。「働くということの根柢には、一が多を生じ、多が一を成すという論理的矛盾が許されねばならぬ」（137, 15）とされる。この「統一の形式」が「時」であり、それは「知ることを知る」という立場において成り立つ、すなわち「働くもの」の「統一の原理」が自覚としての「知るもの」だというのがこの段落の要旨である。詳しく見ていこう。

「思想の三法則」の如き知識においては「作用と作用の内容」が区別できないように見える。例えば我々は「AはAである」という同一律（内容）を考えるにも同一律に従って考える（作用）他はない。これに対し「数理」の如きは「統一の原理」（内容）と「思惟の作用」は「明に区別」される。すなわち「一つの原理に限なき真理を構成」していくと考えられる。幾何学の公理的な体系をイメージすればよいであろう。この場合原理は「時間を超越」し、作用は「時間上の出来事」である。その際でも「時」そのものを「内容」として見れば、異なる今の継起として、「多にして一」ということになる。しかし無時間的な「真理の統一」即ち内容の統一と、時間的な「事実の統一」即ち作用による統一は異なっているだろう。そこで西田は「時の統一とは如何なるものであるか」という問いを立てる。この「時の統一」とは時という形式を通じた、作用による統一の意である。

西田はおそらくカントの図式論を念頭に置きながら「思惟の内容は、時の形式によって感覚の内容と結合することによって、実在界を構成する」（138, 9-10）と述べる。そして多様な「感覚の内容」もそれだけとってみれば（「表象自体」）、「思惟の内容」すなわちカテゴリーと同様に「時を超越」している、とする。それではこの二つの内容はどのようにして結合されるのだろうか。

西田は「物を知る」と「知ることを知る」を区別し、後者が前者の「背後」にあり、「次位」を異にする、と考える。そうして「我々が物を思惟するにも統一の原理がなければならぬ、之によって或物を他から区別するのである。併しかかる統一を知るのは、この統一自身ではない、かかる統一の統一において、始めて之を知ることが出来る」（139, 2-4）と述べる。そうして「時とは、此の如き知ることを知るという立場に於ける統一の形式」だとされる。これを考察しなければならない。

目の前にペンがある。我々はこれをどのように認識しているであろうか。こうした認識がたとえ瞬時になされるとしても、その中には無数の表象が含まれていると考えなければならない。この中には過去に見たペンの記憶も含まれるであろう。そうした無数の表象（感覚の内容）と思惟の内容である「ペン」とはどのように結合するのであるだろうか。

「我々が物を思惟するにも統一の原理がなければならぬ、之によって或物を他から区別するのである」（139, 2）。無限に多様な感覚の内容を「ペン」として認識し、これを「消しゴム」から区別するには「統一の原理」がなければならない、というのである。この「統一の原理」が「思惟の内容」、つまり「ペン」という概念である。我々はこうした概念によって多様な感覚を統一しているのである。しかしどのようにしてであろうか。

我々に対して或る感覚内容が与えられた時、その感覚内容自体は何とも言えないものである。これに応じて直ちに我々は言語ないし概念の網を投げかけてこれを統一しようとする。その際、言語ないし概念は、それ自体は形も大きさもない非感性的なものであるから、それが感性化されなければならない。こうしてある時刻  $t_1$  に知覚 1 が成立する。次の  $t_2$  には知覚 2 が成立する。以下同様に、知覚 3, 知覚 4, … というように成立する。しかし

これらの知覚を次々に忘却してしまえば、「ペン」という認識は成立しようがない。知覚2が成立した時には知覚1が想像力によって思い起こされていなければならない。これも以下同様、ということになる。しかし知覚1, 知覚2, …がバラバラであればやはり「ペン」という認識は成り立たない。してみると、次々と成立する知覚の背後に始めから「ペン」という言葉（概念）が自らを感性化しつつ、想像力を通して統一していたのである。ところで言葉（概念）を通じて多様を統一する働きこそ「考える（思惟する）」ということである。また「考える」ということは自発性の作用として必然的に「私は考える(ich denke)」ということである。それ故に『私は考える』が私のあらゆる表象に伴うことができなければならない（カント『純粹理性批判』B132）。カントはこれを「純粹統覚」ないし「超越論的統覚」と呼び、それによってすべての表象が「私の表象」となるところの「自覚(Selbstbewusstsein)」であるとした。つまりこの「私は考える」という「自覚」によって知覚を含めたすべての表象が総合されるのである。またこの「表象の総合」ということから「私」の同一性も導き出される。これは西田が繰返し問題とする「昨日の私と今日の私」の同一性である。こうして「私は考える」という表象（これは意識されていなくてもよい）によって瞬間瞬間における知覚が成立することになる。その際概念を感性化することを可能にするのが「図式(Schema)」であり、それは直観の形式である「時間」を通じてなされる。すなわち t1, t2, …の多様を統一することを通じて知覚1, 知覚2, …の多様が統一されるのである。

先に「思想の三法則」のようなものは「作用と作用の内容」は区別されないとされていた(138, 3-4)が、こうした「作用の内容」と作用が向かう「対象」とを区別できない「形式論理」のようなものも、形式論理を対象として（「物を知る」）、形式論理によって（「知ることを知る」）、つまり時間を形式とした統覚の統一によって認識が可能となるのである。(139, 4-5)

以上が「我々は物を知ると共に、知ることを知る、我々の思惟する背後に思惟することを知るものがある」(138, 12-13) および「時とは、此の如き知ることを知るという立場に於ける統一の形式である。すべて我々に与えられるものは、此立場に於て与えられねばならぬ」(139, 5-6) の、カントに即した解釈である。こうして「私が見る、私が聞く」ということによって「感覚的内容」が、「私が考える」ということによって「思惟の内容」が、どちらも「この立場」すなわち「知ることを知るという立場」である「自覚の立場」に於て与えられる、そのように西田は言う。

### （第3段落）

前段落で西田はほぼカントに即した議論を展開している。しかし西田はカントの立場ではなく、彼自身の「自覚」の立場に立って述べようとしている。当然「自覚」はカントの言う《ich denke》そのままではありえない。それがこの段落で述べられる。

〈物がある〉ということが成立することにおいてすでに、「自覚」の立場が必要である。まして「物が変わらない」というにはその根柢に知ることを知るということがなければならぬのは当然である。しかし西田はこの「知ることを知る」というところに「作用が作用自身を知る」ということを認め、ここに「判断的知識」ではない、「直観的知識」の成立を認める。これはカントが決して言わないことである。カントは「判断的(経験的)知識」以外の知識を人間に認めないからである。西田はそこを一步(カントにとっては許しがたい一步)踏み込む。そうして次のように言う。「我は、考える我を超越して、思惟によって達することのできない統一を見、感覚的内容も自己の統一の中に入り来るのである」

(140, 1-2)。「感覚的内容も」以下はカントも認めることであり、その後の感覚が記憶によって、さらに記憶が自覚（「我が我を知る（ただしこの「知る」が知的に直観するのでなく、意識されているという意味において:筆者)）によって可能となる、という叙述も、範疇が「自覚の立場に於て成立する」という叙述もカントの主張である。

### （第4段落）

「我々の自覚の根柢」に「超意識的統一」があるというのも、用語はともかく（統覚が超越論的、つまり経験を可能にするという意味において）カントの思想に沿ったものであ

る。それによって「昨日の我と今日の我」が直ちに結合する、というのも、それが「知識成立の条件」であるというのも同様である。しかしカントはそれを「直覚的統一」とは言わない。「自我」を知的に直観することができないというのがカントの立場だからである。人間の知識を「判断意識」に限定するカントと異なり、西田は「判断意識を超越する」立場、すなわち知的直観の立場に立つ。カントにとって「働くものは時に於ての統一」であるのに対し、西田はそれでは「変化」とは言えても「働く」とは言えない、そのように考える。そうして真に働くものは「時を超えた立場に立つものでなければならぬ」と述べ、そうした立場を「我々の自覚の根柢」すなわち「自覚が拠って成り立つ立場」の上に求める。言うまでもなくこれが「直観」の立場である。カントの純粹統覚（「私は考える」）は直観されるものではなかった。これに対し西田はこうした直観を積極的に認めるのである。

カントの「私は考える」の「私」も決して対象化できるものではない。あらゆる表象を「私の表象」としつつ、これを統一することで経験的な実在性を構成しつつ、こうした経験的な実在性を総じて「私」にとっての「現象」に過ぎないと見る「私」である。こうしたそれ自体としては絶対的に空無の「場所」であるカントの自覚（統覚）の内に、西田はさらに一步を踏み込んで「映す我」「包む我」を見る（直観する）。これが西田の「直覚」の立場である。こうした「知るもの」の立場において初めて「働くもの」が成立する、というのがここでの西田の主張である。

### 3. 哲学的問い

「判断的知識」を超えることができないとするカントの立場と、それを越えた「直観的知識」が可能であるとする西田の立場、どちらが正しいだろうか。